

村人の視点から見た商業伐採

—ソロモン諸島ウェスタン州ビチェ村の事例（1）—

田 中 求

1. はじめに

私は地域研究者である。裸で離島や山村に飛び込んで、村の暮らしにどっぷりとつかり、頭の中をまっさらな吸い取り紙にして、いろんなことを染み渡らせていくことに無上の喜びを感じる。

これまで研究対象地としてきたのは日本やミャンマーなどの山村とソロモン諸島の農山漁村である。そもそも、私が山村に入ろうと思ったのは、大学で自分が学んできたことに対して生じた疑問がきっかけであった。私は大学で林学を専攻したものの、酒とサッカーに明け暮れる日々を送っていた。それでも山に対する関心は強く、森に入っただけの作業には喜びを覚えた。枝打ちをしては叫び、測量をしては踊り、全林毎木調査においては、君の大雑把さはむしろ貴重だ、と教官にいわれて喜んでいて。しかしながら、卒業論文を書くにあたり、林学という自分が学んできたものは何だったのかと疑問を持つに至った。林学が森林と人の関わり方の追及をその学問的指針とすることは疑うまでもない。しかし森林と最も密接に関わっているであろう山村の人々の生活について、大学の授業や実習からはほとんどイメージすることができず、林学を学ぶ自分と山村、そして何より山村住民との距離を強く感じるようになったのである。「木を見て、森を見ず」というけれど、「森を見て、人を見ず」ということにも、林学に関わる者は注意を払うべきだろう。

それ以来、人が森林を生活の場とするなかで形成してきた技術や社会、文化

Motomu Tanaka : The Introduction of Commercial Logging from the View of the Villagers—a Case Study of Biche Village, Western Province in Solomon Islands (1)—

(独)東京大学大学院農学生命科学研究科（現筑波大学大学院人文社会科学研究科学振特別研究員）

に関心をもって、山村という現場にどっぷりと浸かることに専念してきた。もちろん、外部者としての限界は感じるものの、食住をともにし、まどっている鎧を自らドシドシと脱ぐことで、相手の警戒心や不信感という鎧や刺を外し、信頼関係を醸成しながら、相手の本音に近づくという姿勢をとり続けている。日本の民俗学者らの調査においては、村人の密造酒を飲みながら、間引き（墮胎）の慣習についての話が聞けたら、かなりの信頼関係ができたといえる、などといわれている。下痢止めだといわれて飲まされたものがケシの実の汁（生アヘン）であったり、誰がマリファナを栽培しているか、どのおばさんが不妊手術をし、どの子が性病にかかり、誰が夜這いに失敗して叩き出されたかなどの情報までが私の耳に日常的に入るようになり、必ずしも嬉しいことばかりではないにしても、村人のなかには深く入るようになってきた。

高知県吾北村では、調査に来たはずなのにいつの間にか酔っ払っていたり、一晩中夜這いの話を聞いたり、という2カ月余りを過ごすなかで、戦後の土地利用の変化を追い、焼畑用地への植林とそれを促してきた政策が住民と森林との関わりを薄れさせ、村の過疎化を進めた一因であることを明らかにした。そして、村人と森林との密度の濃い関わりが、すでに昔話となっていたことがわかった（田中、1996）。

次に向かったのは、現在においても森林を生活の根幹としている人々がたくさん暮らしているミャンマーである。しかしながら、1年半ほど滞在したミャンマーでは、自治権の拡大を求めるシャン人やカレン人、カチン人などの武装組織と山村住民との繋がりを断つ目的を含めた山村の廃村化と強制移住が行われており、山村での長期滞在型の調査許可を得ることが困難であった。さらに山村での調査には護衛兵と森林官が同行（監視）するという迷惑極まりない条件を突きつけられた。しかしながら、予備調査で私が問題となるような調査をしていないことを知らしめ、本調査では、護衛兵、森林官ともに同行を嫌がるような奥地を調査対象地とすることで、単独での山村滞在に成功した。

トイレットペーパーの代わりに竹べらを用いる村での暮らしに当初は戸惑ったものの、トイレ用の藪に向かう私の姿を見つけると、それご馳走だとテッテケ走ってついてくる仔猪たちを、竹べらで叩きながら脱糞する歓びに目覚めた。収穫祭では村の女の子から誘いを受け、村長からも5年後に戻ってくるなら子どもを残していってもよい、といわれて一晩中悩んだりしながらも、廃村を経て再構築された焼畑システムの実態を追いつけた。

特に興味を引かれたのは、商品経済と関わりの強い山麓部などへの強制移住

を経験した村人が、帰村後に村の再建を進めていく過程で、市場アクセスのよい土地のみでなく、市場アクセスが悪いものの、より多くのコメ収穫量を期待できる土地にも新たな集落を形成していたことである。村人は焼畑によりコメを自給していく暮らしを高く評価していたのである。伐開、火入れに始まる耕作、そして休閒という焼畑のサイクルは、多様な資源を生み出し、豊かな社会システムを構築していた。火入れ直後に顔を出す食用キノコの数々、精霊が宿るとされる焼畑には、陸稲とともに花の種が播かれ、観賞用、祭祀用とされるのみでなく、おやつになるカブトムシを集める役割も持っていた。花の有無が陸稲の生長、除草具合に加えて、村人が各自の焼畑を評価するときの材料にもなっていた。ミャンマーの森林官たちが劣化林だと嫌う休閒林から採取される食用資源は、42 種にのぼった。さらに焼畑労働における多様な労働交換、労働提供、各世帯の事情に合わせた公平な焼畑用地の分配、アプーイエエイというコメの貸借慣習によって構築された村全体でのコメ自給システムは、焼畑を生業としてきた山村の人々が獲得し、誇りをもって維持しようとしている生存戦略の 1 つであったのである。しかしながら、アラカン（ラカイン）山脈の奥地にあるこの山村にも、焼畑規制政策の強化および慣習的土地認識と公定境界との乖離による退去勧告など、外部社会の影響が及びつつあり、村人の森林を生活基盤とした生存戦略自体が転換を余儀なくされていることがわかった（田中，2001）。

世界中のどんな奥地においても、外部社会の影響からは免れ得ないであろうことを知り、向かった先はソロモン諸島である。森林を生活基盤とする地域社会に大きな影響を与える開発の 1 つである商業伐採が行われているソロモン諸島を、新たな研究対象地を選んだのである。次章以降では、商業伐採対象地の地域住民の生活を軸とし、なぜ商業伐採がソロモン諸島で進んだのか、そして地域社会がどのように変容しているのかについて、説明していこう。

2. ソロモン諸島における商業伐採

ソロモン諸島を研究フィールドにしている、というところにあるのかとよく聞かれる。ソロモン諸島は、パプアニューギニアの東、オーストラリアからみて北東に位置している。また、ソロモン諸島が独立国であることを知らない人も多い。しかしながら、ソロモン諸島と日本の繋がりはいけって薄くはない。20 世紀初めには、ボタンや装飾材料となるタカセガイを採集する日本船がソロモン諸島海域に来ていた記録が残っている（Bennett, 2000）。またガダルカナ

ル島という名前は、第二次世界大戦の激戦地として、多くの人々の記憶に残っているのではなからうか。ガダルカナル島にはソロモン諸島の首都ホニアラや国際空港がある。ホニアラ国際空港周辺には、高射砲などの戦跡や慰霊碑などがあるほか、ソロモン諸島各地に軍艦や戦闘機、戦車などの残骸があり、ときにダイビングスポットなどになっている。

戦後においても、2001 年まで大洋漁業（現、マルハ）がソロモン諸島海域で操業し、カツオやマグロの缶詰、荒節の生産を行うなど、日本人の食卓との繋がりも形成されてきた。さらに日本は、ソロモン諸島から多くの木材を輸入してきた国の 1 つでもある（図 1）。第二次世界大戦中に日本軍のみでなく、アメリカやオーストラリア軍などが駐留したソロモン諸島は、豊かな森林資源を持つ地域として多くの国から認識されることとなった（Bennett, 2000）。特に 1990 年代以降、ソロモン諸島での商業伐採は急増している。1970 年代から 1980 年代にかけて、年当たり 20～40 万 m³ で推移してきた丸太輸出量は、1990 年代には約 80 万 m³ にまで急増し（図 2）、商業伐採はソロモン諸島の重要な外貨獲得手段の 1 つとなっている。

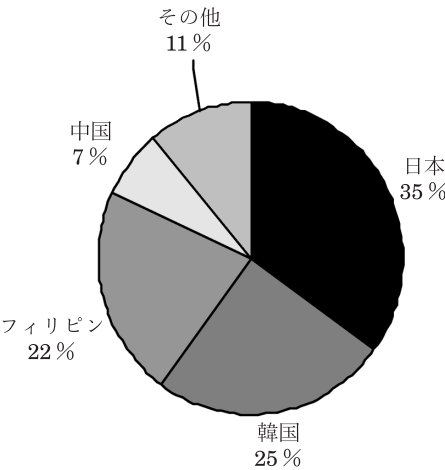


図 1 ソロモン諸島における 1994～2001 年の輸出先別丸太材積割合
出 所： Central Bank of Solomon Islands, 丸太輸出統計資料より作成した。
注：その他には、インド、タイ、香港、シンガポール、マレーシア、ヴェトナム、オーストラリア、イギリスが含まれる。

ソロモン諸島において、商業伐採が集中しているのがウェスタン州である（図 3）。なかでもマロヴォ・ラグーン（礁湖）では、1990 年代後半から商業伐採が急増している。ウェスタン州の東南部に伸びるマロヴォ・ラグーンは 700 km³ もの広がりをもつラグーンであり、その美しさと生態系の豊かさから、世界自然遺産の候補地ともなっている（Hviding and Bayliss-Smith, 2000）。筆者が 2001 年 1 月から 2002 年 9 月にかけて、4 回計 9 カ月間滞在したビチェ村（写真 1）は、マロヴォ・ラグーンの東南端に浮かぶ直径約 10

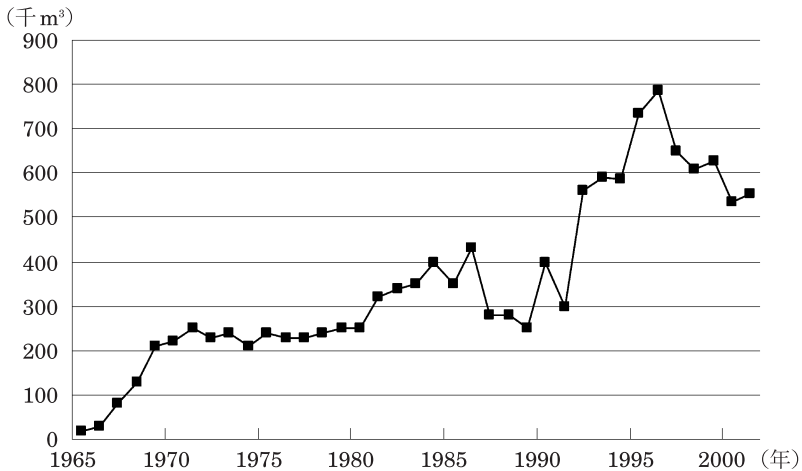


図 2 ソロモン諸島における 1965～2001 年の輸出丸太材積
出所：Bennett (2000) およびソロモン諸島中央銀行、丸太輸出統計資料より作成した。

km のガトカエ島の南部にある (図 4)。次章では、ビチェ村の自然資源を基盤にした暮らしについて、簡単に説明していこう。

3. ビチェ村の暮らし

ビチェ村に初めて訪れたのは、暴風雨の明けた昼のことだった。村に入るとすぐに、ボールペンや砂糖、MILO などの贈り物を持って長老の小屋へ向かう。直接話し掛けることは許されず、全て村人の 1 人が私の英語を通訳する。

「私は学生です。村の皆さんの自然の中での暮らしについて勉強したいと考えております」。通

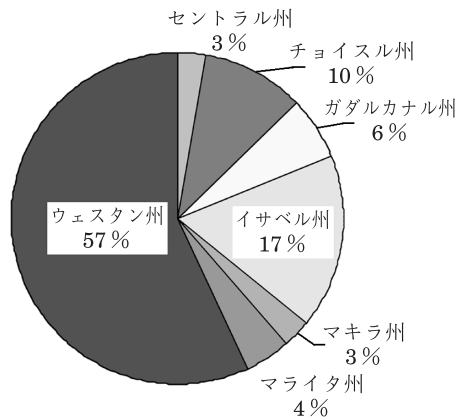


図 3 ソロモン諸島における 1994 年から 2002 年までの総丸太輸出货量に対する各州の丸太生産量割合
出所：Central Bank of Solomon Islands (2002) および Ministry of Forests, Environment & Conservation (2002) の統計資料より作成した。
注：2002 年については 8 月 31 日までの輸出材積である。

訳役の村人がややもったいぶった面持ちで長老の耳にささやく。長老「レアナ・ピア（マロヴォ語で大変よろしいという意味）」。私「ありがとうございます。つきましては村の誰かの家に居候させてもらいたいのですが」、長老「レアナ・ピア」、通訳「大変よろしいとおっしゃっている」、私「学生なので宿泊費などはあまり払えないのですが」、長老「レアナ・ピア」。

こんなやり取りを繰り返し、すぐに村での居候が決まった。結局、長老は大変よろしいとしか言わず、本当に私の言葉が伝わったかは怪しいものだったが。私を村まで送ってくれた他の研究者の方々が乗るボートを見送り、隣にいた村人にこれで私は自由だ、と笑いかける。

そして、村にどっぷりとつかう日々が始まる。マロヴォ語を学び、村の慣習、歴史、村人同士のいろんな資源のやり取りを追いかける、刺激の多い毎日である。ああ今日も楽しかった、面白かったと鼻息荒く寝床で調査のまとめをしながら眠りにつくという、そう、まるで子どもの頃の夏休みのようである。もちろん、焼畑の測量や樹木位置図を作るために森に入ることも多い。帰り道には居候先の奥さんから厳命されて、イモや薪、水を運んだり、魚釣りに精を出したりする。赤ちゃんの世話も任せられる。居候といっても家でゴロ寝が許されるわけではないのである。

ビチェ村は人口120人余りの小さな村だが、19世紀末まではガダルカナル島などにまで首狩り遠征を行っていた勇猛な海人の大酋長の家系にあたるマテンゲレという親族集団（以下、マテンゲレ集団）が暮らしており、まとまりのあるよい村である。ビチェ村にはガスはもちろんのこと、電気も水道もないが、その代わり自然は底抜けに豊かである。電気などがないからこそ、自然のあり

がたみを強く感じるのかもしれない。毎朝には浜辺に並んで連れ脱糞、夕方になれば石鱸の貸し借りをしながら川で水浴び、満月の光の下でのマロヴォ語での四方山（よもやま）話、焚き火を囲んでの密談、いずれもとても楽しく、また面白いネタを仕入れる格好の場でもあった。

村人は、1915年以降、キリスト教の1宗派であるSDA



写真1 ビチェ村

(Seventh Day Adventist) を信仰している (Neufeld, 1976)。SDA は、週の第 7 日である土曜日を安息日とし、酒、タバコ、コーヒー、紅茶などの嗜好品、ブタ、ウナギ、甲殻類、貝類などの食用が禁じられているほか、信者は収入および生産物の 1~2 割を教会などに寄進することが求められる。

従来の収入源は、ココヤシ (*Cocos nucifera*) の胚乳を乾燥させたコプラ、ソロモン諸島で有数の産地となっている調理用の石壺、タカセガイなどであったが、現在ではこれらに加えて、首都ホニアラへの魚販売や、1990 年代に入りヴァングヌ島、ガトカエ島で行われ始めた商業伐採キャンプへの農作物販売、伐採雇用労働、1999 年以降のロッジ経営なども収入源となっている (表 1)。

ガトカエ島は、その中心部に標高約 800 m の活火山であるマリウ山がそびえ、山頂周辺はコケをまとった原生林に覆われている。村の周囲には、ココヤシやナッツ類 (*Canarium indicum*) などの村人にとって貴重な資源となる森

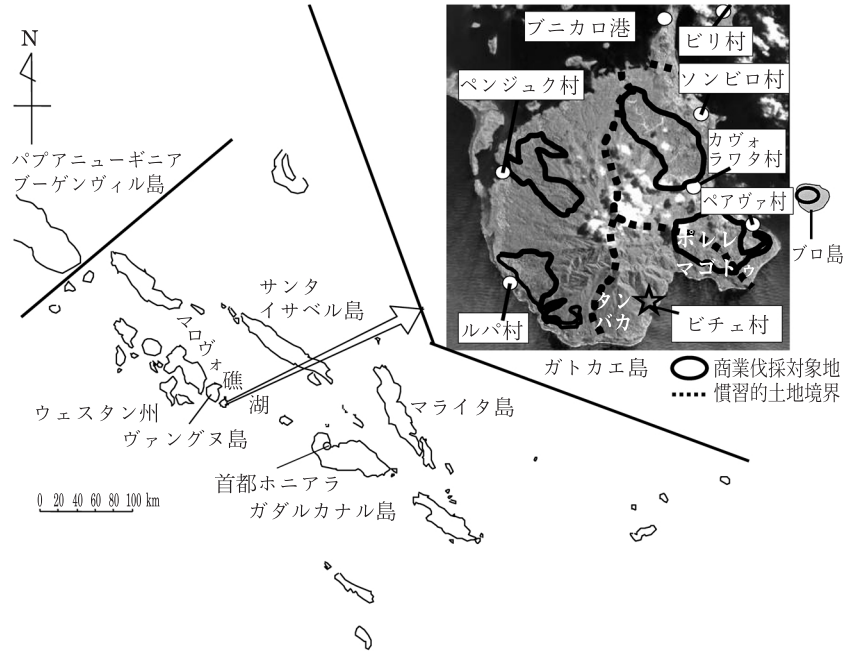


図 4 ソロモン諸島およびガトカエ島
出所：ガトカエ島での商業伐採対象地図は、EROS-A1 衛星画像を用いた聞き取りおよびフィールド調査より作成した。

林が広がる。さらにタロイモやヤムイモ、サツマイモなどのイモ類やバナナ、ショウガ、ナスなど 56 種もの多様な作目が栽培されているほか、伐開時に残された有用樹なども繁る焼畑、そしてその休閑林など人の手が加わった二次林が形成されている。

薪に用いられるのは、流木や焼畑、休閑林などの倒木が多く、わざわざ木が切り倒されるようなことはまずない。それでも火持ちや火付きのよさなどの理由で、重用される樹種があり、その倒木については誰が初めて見つけたかで、小さいいさかいが生じることがある。しかしながら、村人各自が焼畑で栽培している作物や幼樹の頃から除草するなどして管理してきたナッツ類や果樹などを除き、全ての森林資源は村人全体での共同利用資源である。村人であれば、どの焼畑や休閑地などから建材や燃料を採集しても、とがめられることはない

表 1 ビチェ村における収入源の変遷

年代	主な収入源	歴 史
1910	石壺, タカセガイ, ヤコウガイ, サゴヤシのタネ	1915 年 SDA の布教受け入れ
1920	石壺, タカセガイ, ヤコウガイ, サゴヤシのタネ	1922 年ガトカエ島を四分し、 各土地のチーフを決定
1930	石壺, タカセガイ, ヤコウガイ, サゴヤシのタネ	1939 年大地震
1940	石壺, タカセガイ, ヤコウガイ, サゴヤシのタネ	1948 年タロイモ灌漑栽培地に 洪水被害
1950	石壺, タカセガイ	1952 年津波被害
1960	石壺, タカセガイ, 農作物	1963 年他村の学校に農作物販 売開始
	石壺, タカセガイ, 農作物, コブラ	1969 年コブラ販売が本格化
1970	石壺, タカセガイ, 農作物, コブラ, カカオ	1979 年カカオ栽培開始
1980	石壺, タカセガイ, 農作物, コブラ	1984 年コブラの収入で船外機 購入
1990	石壺, タカセガイ, 農作物, コブラ	1992 年ヴァングヌ島の伐採企 業へ農作物販売
	石壺, タカセガイ, 農作物, コブラ, 魚	1993 年台湾企業へ魚販売, コ ブラ価格下落
	石壺, タカセガイ, 農作物, 魚	1996 年プロ島で商業伐採開始
	同上+伐採労働, 伐採権料	1997 年ボレレでの商業伐採開始
	同上+伐採労働, 伐採権料, ロッジ	1999 年外国人向けにロッジ開始
2000	同上+伐採労働, ロッジ	2000 年稲作の試み失敗
	同上+ロッジ, 製材販売	2001 年村人による製材販売開始

出所：聞き取り調査より作成した。

のである（田中，2004）。次章では，焼畑を中心に資源利用についてもう少し詳しく説明しながら，ビチェ村の人々がなぜ商業伐採を導入したのかを明らかにしていこう。

4. ビチェ村における商業伐採の導入要因

かつて，ビチェ村では居住域周辺でのタロイモの灌漑栽培と，居住域から徒歩 10 分ほどの距離にあるタンバカと呼ばれる土地での焼畑によるタロ，ヤマイモ栽培が行われていた。しかしながら 1939 年の地震，1948 年の大洪水以降，川の水量が減少し灌漑栽培は行われなくなり，1995 年までタンバカが主な焼畑用地とされてきた。そして，ボレレでの商業伐採が始まった 1997 年以降，新たな焼畑用地としてボレレを利用する村人が増加している（図 5）。商業伐採の導入要因の 1 つに，村人の焼畑や資源利用に対する認識が大きく関与していることを以下に説明していこう。

タンバカは，マテンゲレ集団の全成員が利用可能であり，焼畑として開拓した土地は，開拓者を祖とする小集団によって共同利用され，個人による土地売買や譲渡は禁じられている。マテンゲレ集団は，主に 6 つの小集団に分かれており，小集団ごとに共同利用する土地があるほか，新たに焼畑用地を開拓している世帯もある。しかしながら，タンバカには食用資源として重要なナッツ類が多く，各個人が利用権を持っており，むやみに伐倒し焼畑を広げることがで

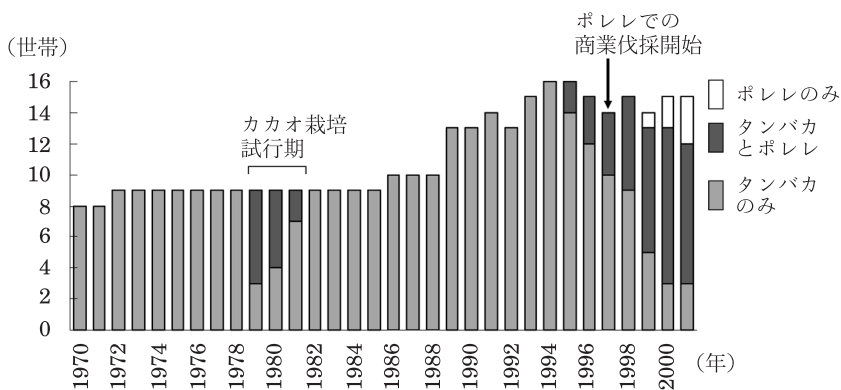


図 5 ビチェ村における焼畑用地別利用世帯数

出所：16 世帯を対象とする聞き取り調査より作成した。

注：各焼畑用地の利用世帯数は，婚姻にともなう分家で 8～16 世帯まで変化している。

きない（図6）。

ナッツ類は、生食されるだけでなく石蒸しして保存食にもなり、キャッサバで作るケーキなどにも添えられる重要な食料である。さらに、贈答品としての価値も高い。そのため、ナッツ類の樹木は村人に大事に管理され、自由に伐採することが制限されている。ナッツ類の採集は7月から11月にかけて行われる。村人は自給用だけでなく、親族や友人などへの贈答用にするため、夜遅くまでナッツ割りに精をだす。結婚などにより村を離れた人びとのなかには、ナッツの採集期に帰省する者も多く、ビチェ村は賑わいをみせる。2001年の9月から10月にかけての1カ月間に、31名もがナッツ採集のために帰村したほどである。

ビチェ村の人々の環境認識において、個人に利用権の属するナッツ類の維持が焼畑用地の拡大よりも優先されており、村人が新たな焼畑用地を必要とした要因の1つとなっていた。焼畑において、50種あまりの植物が栽培されているものの、村人と他出者を結びつける役割も持つナッツ類は、村人たちの暮らし

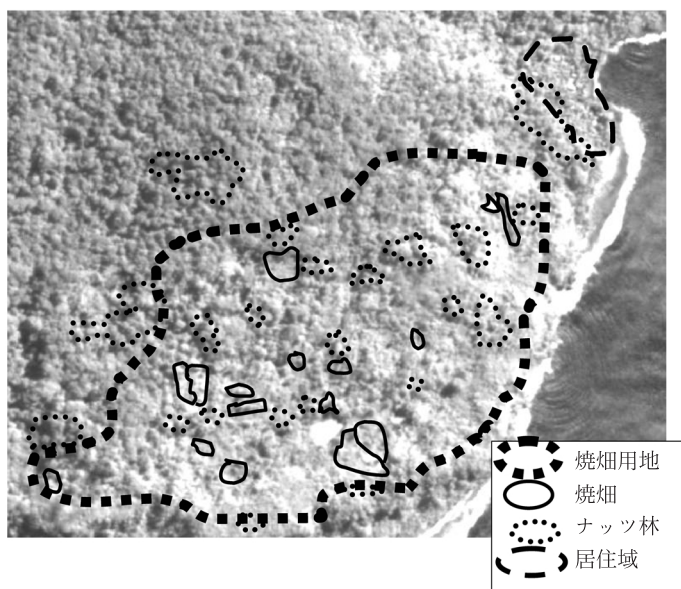


図6 タンバカにおける焼畑およびナッツ位置図
出所：聞き取りおよび EROS-A1 衛星画像を用いたフィールド調査より作成した。

表 2 2001 年のビチェ村住民の年間支出（ソロモンドル）

支出項目	教育費	食料品	石油	衣類	石鹼	電池	灯油	医療費	その他	合計
世帯合計	6,836	9,908	2,344	453	1,678	780	837	41	2,307	24,914
世帯平均	427	620	146	28	105	49	52	3	127	1,557
割合(%)	27	40	9	2	7	3	3	0	8	100

注・出所：教育費以外の項目は 16 世帯を対象に聞き取り調査を 7 週間行い、年間支出を推定した。調査は、小学校の開校が予定されていた時期に行っており、教育費は就学予定児童数を踏まえて算出した。

その他には、タバコ、豆電球、マッチ、釘、調理具、釣具など。

収入の 1～2 割の教会への寄進については、支出に含めなかった。

の中で重要視され続けているのである。

また、ビチェ村の人口が 1940 年以降、現在までに 5 倍以上に増加していることも、村人がタンバカの焼畑用地を手狭に感じる理由となっている。さらに、村人がタロ栽培に適さないと認識している乾燥赤色土が多くなったこともあり、新たな焼畑用地が必要とされ始めた。新たな焼畑用地は、原生林の多かった土地、ポレレである。そしてポレレでの商業伐採が始まった 1997 年以降、伐採跡地を焼畑として利用する動きが急速に進むこととなったのである。

焼畑における伐開作業は、かつてのポレレのように原生林の多い地域では、二次林の 2.5～4 倍の労働量が必要だが（佐々木、1970）、村人は商業伐採跡地を利用することで、新たな焼畑用地の伐開の手間が省けることを歓迎した。外部者である伐採企業に対する不信任や島の資源の枯渇を危惧し、当初は商業伐採を拒否していた村人たちであるが、やがて伐採企業に雇用され、自らチェーンソーを手に伐採に参加し、伐採跡地の焼畑利用を進めていったのである。

さらに 1980 年代後半からコプラの国際価格が暴落し、村人が柱となる収入源の 1 つを失っていたこと、そして教育費の負担の大きさ（表 2）も、村人に商業伐採を受け入れさせる要因の 1 つとなった（田中、2002）。

次報では、商業伐採の導入後、ビチェ村がどのように変容したのかを説明します。